

あるクリスマス

真崎 隆治

クリスマスの思い出はいくつもいくつも
ある。クリスマスにはそれだけ深く心にな
にかをおよぼすものがあるのだろう。その
中の一つ。

初めてフランスに渡ったのは、もう25
年前で、ストラズブール大学の留学生とし
て学寮に寄宿していたのだが、クリスマス
が近づくと、5・60人いた寮生たちは一
人去り二人去りして、ついにアフリカから
来た一人と私だけになり、食堂は閉まり、
寮は閑散どころか寒々として、ヨーロッパ
の冬のひたすらに低く垂れこめる陰鬱な空
の毎日にただでさえ気の滅入るところを、
ほんとうは浮き足立つはずのクリスマス
前にして、まったくの一人ぼっちとは、こ
れはもうたまったものではなかった。

イヴの町はイリュミネーションも華やか
に、まさにこれぞ夢に見たヨーロッパの本
物のクリスマスの風景なのだが、通りには
人っ子一人いない。日本のお盆と同じに、
すべての人が家庭に戻ってしまうからだ。
美しく、暖かそうに飾られたショーウィ
ンドウを横目に、凍てつく町を靴音ばかりが
コツコツと、うつむき加減に歩いていると、
ああ、これがマッチ売りの少女の世界なの
だ、と妙に納得された。

クリスマスが過ぎて数日たつと、学生た
ちもおおむね戻り、寮は活気を取り戻した
のであるが、親しくしていた友人の一人が
やってきて、「君、大晦日にぼくんちに来
ないか」といった。クリスマスはおミノに
しての大晦日、どこか少し拗ねながらも、
やはり嬉しく、31日はいそいそとローカ
ル線に乗っていた。

アルザスの観光スポットの一つであるコ

ルマールから西に、ヴォージュ山脈に向か
う谷間を2両連結の気動車で20分ほど
入ったマンステールという小さな町が彼の
故郷で、そこにはもう一人の親友の家族も
住んでおり、すでに何度か訪れたことがあ
る。

「日本人は正月のほうが大事だと思った
から」というこのパーティーは、二人の友
人の家族合同で私のために開かれたもの
だった。心づくしの料理の数々、土地のワ
イン、強烈な匂いだが実になめらかな舌ざ
わりのマンステール・チーズ。そして、食
後、皆が改まった雰囲気となり、ジャー
ン、といった感じで、マンステールの谷の農
民夫婦の人形をプレゼントされたとき、私は
何も見えなくなっていた。涙があふれたの
である。気恥ずかしかったけれど仕方がな
い。それはあのクリスマスの孤独感への反
動であり、逆に言えば、クリスマスはそれ
ほどに人との温かいふれあいを期待させる
ものなのであった。

昔見た映画で、題名も何も忘れてしまっ
たが、激しい戦争のさなかにクリスマスと
なり、両軍の申し合わせで休戦が実現する。
敵味方が肩を抱き合っしてしみじみとクリ
スマスを祝い、互いの無事を祈り合ううち
に時間切れとなり再び凄惨な殺しあいのは
じまる、という場面があった。

今私は神学的な意味でのクリスマスを語
るのではない。体験的なクリスマスといお
うか。あるいは人々の心の願いの中にある
クリスマス。それは平和であり、幸せであ
り、人との温かい交わりであり、憎しみ、
恨み、孤独の対極に位置するものである。
主義主張も国境も、時代さえもこえて、愛
する喜びを実感し、愛しあうことの大切
さに思いをいたす共通の瞬間があるとす
れば、クリスマスをおいてほかにはないであ
ろう。たとえ年1回限りのほんの瞬間の時
間にすぎないにしても、それはたえず新た

人間を励まし、希望をかきたててくれる炎
としての共通の時間なのである。

(まざき たかはる 所員・文学部教授)